

◆「社史」はなぜ創られるのか？

今回は、「社史」に注目してみたい。

社史とは、企業が発行主体となって自らの創業と発展の歴史を綴った歴史書的一种である。「創立〇〇年」などを記念して会社の予算で制作され、それを祝う式典にて無料で配布される書物である。分厚く立派な装丁がなされているけれども、誰が読者としてこれを読むのか、今ひとつよく分からない書物である。

いったいなぜ、このような書物が刊行される必要があるのだろうか。「歴史を体感するレッスン」のお題の一つとして、これを考えてみたい。

そもそも日本は世界有数の「会社史大国」なのだそう。社史は出版市場の流通経路にのらないものも多いので正確な刊行点数は把握しきれていないというが、参考文献にあげた村橋勝子の調査によると、明治以来、実に約 13000 冊の社史が刊行されたという（2002 年時点）。そして更に特徴的なのは、この書物が多くの場合、外部組織への業務委託やあるいは別の組織・個人によって編集・刊行されるのではなく、スタッフも含め、その多くが自前で創りだされているという点である。それはある意味、企業がその組織の中にお抱えの「歴史家」を持つということである。

これに対し、例えばアメリカなどでは、社外の専門研究者（経営史や産業史）が自由な立場から記述して、公刊されることが多いという。もちろん、それは企業にとって都合の悪いことが書かれてしまう可能性も意味しているけれども、そのぶん経営史や産業史のために必要とされる業績として学術的にも重要な意味を持つ。多くの場合、歴史を批判的／肯定的にどう書くかということは、内部資料へのアプローチ可能性との取引になるので、そのせめぎあいはスリリングなものとなっているだろう。

となると逆に気になってしまうのは、「お手盛り」感の強い日本の社史が刊行され続ける理由である。このあたり経営の合理性として、どうなのだろう。投じられる予算に応じた効果が、本当に企業価値に対してもたらされうるのか。

年別の刊行点数をみると、1970 年代後半から 90 年代前半までがピークである。多くの企業が経済不況に苦しんだ 1990 年代後半以降、社史の出版が落ち込むのも無理はない。では社史は、会社のバブリーな産物なのか。とはいえ、2000 年に至ってもなお、「近年の社史の発刊ブームは前代未聞」などといわれている。（もっともこの 10 年ほどでさらにその状況が変化している可能性はある）参考文献に挙げた四宮俊之が指摘するように、2000 年代というのは、敗戦後 10 年以内に創業した企業が 50 周年を迎える時期だからである。とすれば逆にいえるのは、社史の刊行は好不況の波によるものだけでなく、それ自体が生き物のようにみえる企業の多様な活動による産物だということだ。

PR 活動の一環としての位置づけ、あるいは社員教育や採用活動での効果など、具体的な意義もあるだろう。ただ一方で、そうしたものに回収されないもの、つまり会社が誕生し

成長し、自意識のようなものを持ち始めるときに社史が必要とされるということがある。

終身雇用が前提されていた時代であれば、新卒としての入社から定年まで40年未満の年月がある。あるいは社史編纂を指示できる経営層になるともう少し延びるだろうか。そうした会社人の一生があり、人生の重要な時間をそこで過ごす人びとの出入りによって、会社という組織は新陳代謝を繰り返す。そして、そこで起源の喪失や、困難やその克服に関する忘却に対する恐れから、社史が編まれるわけだ。

それは、会社が経営の合理性からは説明できないようなものを、その「歴史」の名によって背負わされているということの現れである。体感する歴史の社会学のためにも、社史の検討、いわば社史のメタヒストリーは示唆的だろう。もちろん、終身雇用を前提としていた雇用慣行からの変化が社史のあり方を今後どのように変えるのかということも含めて考えてみてもよい。

社史は、われわれ人間社会の「歴史」への対し方をめぐる実験室にみえるのである

ところで、『舟を編む』で有名な三浦しをんが書いた小説に、『星間商事株式会社社史編纂室』（ちくま文庫）がある。タイトルの通り、「星間商事」という商社の社史を創ろうとする人々の物語だ。

会社組織の一員ではあるが、所属する組織を歴史記述の対象とするという意味で、彼らは会社のなかで少し（かなり？）「浮いている」人々である。いってみれば彼らは遊撃隊・独立部隊のような位置づけである。組織の内部にありながら、組織の中心的な価値観から相対的に自由で、その中心から外れている。その分だけ、（好意的な読者からみれば）組織の潜在的可能性を広げる能力も孕んでいる集団なのである。

そのメンバーは、物語終盤まで姿をみせない文字通りの「幽霊部長」、元文学青年で中年男の悲哀を映し出す課長、女性関係から社史室に飛ばされてきたという噂の「ヤリチン先輩」、つねに男性の性的な視線を浴びやすくありながら、悪びれもせず、萎縮もせず生きている後輩女子社員など、有能（？）だが灰汁が強い人々である。かれらを配して物語は軽快に進んでいく。一番重要な主人公は、有能でありながら仕事より趣味を選ぶことにしたOLであり、帰宅後や週末は、中年課長とヤリチン先輩をモデルにしたボーイズラブ（男性同士の恋愛もの）小説を密かに執筆している。これを同人誌にしてコミケ（コミック・マーケットとよばれる大規模同人誌販売会）で売りさばくというもう一つの顔を持っているのだ！（文庫版には社会学者・金田淳子の「解説」が付いている）

そんなかれらは文書資料と口述史を組み合わせる社史を作ってゆこうとするのだが、隠されていた会社の秘密に思わぬかたちで行き当たり、関係する各位からの妨害や脅迫を受けてしまう。それに対し彼らは、会社の正式な社史のほかにもう一つの社史（裏社史）を作り、コミケで売ること決心する……という話である。

まあ、馬鹿馬鹿しい物語ではある。基本的に、会社という価値を相対化できている（とされる）人々を中心に描かれるので、ぎらついた、例えば企業小説のような手に汗握る展

開はない。ご都合主義的なところもあるし、周辺に配された人物たちも、「ああそういう『設定』なのね」という人ばかりである。

自己抑圧的でなく、そこそこ楽しく生きている人たちが、それでも意地になって裏社史を編纂しようとするわけだ。結局、かれらの意地を支えるのはささやかな正義感で、物語を一言でまとめてしまえば、ぬるく生きているからといって、あるいは、だからこそ、世の不正義を認めたくない、ということらしい。社史編纂はその媒介になったわけだ。

けれども、こうした登場人物たちとその配置・ストーリーに、何か、「歴史」をめぐる著者の思考実験のようなものを感じていたのも事実である。そしてこの小説の作者である三浦しをんが『古事記』の校訂や注釈で有名な三浦祐之の娘だと知り (Wikipedia で知った)、改めて「なるほど」と思う。この小説は、単に社史編纂をめぐる一騒動を描いたものなのではなく、二つの「社史」の成立を描いたものであるということだ。つまり、二つの社史とは、要するに『日本書紀』と『古事記』のようなものなのだと分かったのである。

つまりこの話、記述対象となる組織・集団の一員が、その一員のまま誠実に歴史を書こうとするとき、それが二つ必要になるという話なのだった。

そして「裏社史」は、コミケで売られることになっていたように、より「物語の力」を借りて表現されることになる。このあたりも、『日本書紀』と『古事記』の関係を思わせる。

もちろん、『日本書紀』が実証的で、『古事記』が暴露的と書いているわけではない。ただ、歴史を書くことは、何をどう書くかという葛藤から、ときにもう一度それを別の形で書かなければすまなくなるような余剰を生み出すということだ。そのことは覚えておいてもよいだろう。

■ 参考文献

村橋勝子『社史の研究』ダイヤモンド社、2002年

四宮俊之「社史(書)編纂の目的と意義をめぐって：それは何故に編纂されるのか」『人文社会論叢 社会科学篇』(弘前大学) 4号、2000年